様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３８０８４５

研究課題名（和文）社会的動機の充足プロセスにおけるネットワーク構造と組織システムの制御資源保存機能

研究課題名（英文）The effect of network structure and organizational system to preserve self-control resources in fulfilling social motivations.

研究代表者
相馬　敏彦（Souma, Toshihiko）

広島大学・社会科学研究科・准教授

研究者番号：６０４１２４６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　人はさまざまな社会環境の下、時に快への接近を動機づけられ、時に不快からの回避を動機づけられる。これらの動機づけ間の関連について、その充足プロセスに着目するならば非対称性がみられる可能性がある。回避動機の充足プロセスにおいては、自己制御のための資源がより必要になるといえる。この研究では、さまざまな文脈における動機充足を実験、調査しその妥当性を検証した。
　ポジティブな感情をもつことや、チーム単位での報酬体制にあることによって、利用可能な資源が確保されやすく、結果的に回避動機の充足が達成されやすくなることが示された。また、回避動機の充足困難の継続が、動機対象からの回避を導くことも示された。

研究成果の概要（英文）：Individuals with approach motivation seek to obtain positive outcomes from their social relationships, while those with avoidance motivation seek to prevent negative outcomes from their social relationships. The process of fulfilling approach motivation and avoidance motivation would be asymmetric. It is suggested that more resources for self-control are needed for fulfilling of avoidance motivation than the fulfilling of approach motivation. In this study, we examined the process of fulfilling social motivation in various contexts through experiments and surveys.

研究分野：社会心理学

キーワード：接近・回避　組織　親密な関係　動機の充足　自己制御

１．研究開始当初の背景

人はさまざまな社会環境の下、時に快への接近を動機づけられ、時に不快からの回避を動機づけられる。これまでの社会的動機に関する研究では、その充足へと至るプロセスにおいて接近動機と回避動機との対称性を仮定してきた。しかし、広く動機づけを対象とする知見には非対称性を示唆するものもあり、自己制御の特徴を踏まえた社会的動機づけの充足プロセスの理解が必要である。

２．研究の目的

この研究では、次の４つの問題を解決することで、社会的動機づけにおける自己制御過程の非対称性を明らかにしようとした。

(1) 状況的に接近もしくは回避が動機づけられた場合に、どのような社会目標が生起しやすいのか。
(2) 社会的文脈における不快回避としての攻撃が、どのような場合に生じやすく、逆にどのような場合に抑制されやすいのか。
(3) 組織場面において、回避動機の強い従業員でも変革行動をとろうとするのはどのような場合か。
(4) 親密な対人関係において、相手から受けた暴力的な振る舞いによって、その後の社会的動機はどのように変化するか。

３．研究の方法

(1) 大学生 33 名を対象とする実験室実験を行った。被験者は、始めに赤、青、黒のいずれかの背景色をもつモニターを前にして単語記憶課題を行った。その後、さまざまなコミュニケーション場面で喚起される目標について回答した。
(2) 大学生 81 名を対象とする実験室実験を行った。被験者は、事前に攻撃特性や自己制御能力についてのアンケートに回答した上で、実験室において他者との協同作業を実施した。そこでは、作業時にどのような感情が喚起したのかを回答した後、作業パートナーから挑発的な振る舞いを受けた。その後、そのパートナーに対する攻撃行動が測定された。
(3) 製造業、保険・金融業、IT 業のいずれかに就いている合計 1002 名を対象とするインターネット調査を行った。被調査者は、自身の接近回避志向性、職場でのテイキング・チャージ（変革）行動、また職場の報酬体制がチーム単位か個人単位か、さらに職場のおかれている環境の変化についての認識について回答した。
(4) 親密な関係をもつ152名を対象とするオンラインでのパネル調査を行った。被調査者は、初期時点での社会的接近・回避動機、接近・回避動機の充足行動、ならびに相手からの間接的暴力被害について回答した。

４．研究成果

(1) 赤モニター条件の被験者は、他の条件に比べて、回避動機に関する単語の再認成績が高かった。また、コミュニケーション場面においてより困難な目標を喚起しやすかった。接近動機については、青モニターによって再認成績が高まることはなかった。これらのことから、状況的に回避動機が喚起されることで、社会的文脈でより資源を必要とする自己制御プロセスが生じやすいことが確認された。
(2) 攻撃性、自己制御能力、ならびに作業時の感情による攻撃行動に対する交互作用効果を検証した。その結果、攻撃性が攻撃行動に影響したのは、制御能力に乏しくかつ作業時にポジティブ感情をもたない場合であった。言い換えれば、制御能力に乏しくても、ポジティブ感情をもつならば、攻撃行動は抑制されることが示された。つまり、不快回避としての攻撃行動は、自己制御資源の多寡によって実行されうることが示された。
(3) 自身の回避志向性、職場のおかれている環境変化の認識、ならびに報酬体制のテイキング・チャージ行動に対する交互作用効果が示された。回避志向性の強い者であっても、職場環境に変化が求められていると認識し、かつチーム単位での報酬体制であるとテイキング・チャージをとることが示された。同様の分析を、回避志向性を接近志向性に代えて実施しても、これらの交互作用効果は示されなかった。この結果のうち特に報酬単位のもつ効果に着目するならば、回避動機が喚起されやすい者でも、個人の自己制御資源にあまり負荷がかからない状況であれば、回避動機が充足されやすいといえる。そして、接近志向性では同様の効果がみられなかったことから、上記の結果は回避動機に特有であることが示唆された。
(4) 初期の社会的回避動機の充足行動と相手からの暴力被害とが、初期の回避動機を統制した上で、約半年後の回避動機に及ぼす影響を検証した。初期において回避動機を充足させるための行動をとっていない場合、相手からの暴力被害を受けるほど後に回避動機を強くもった。一方、初期に回避動機充足行動をとっているにもかかわらず相手からの暴力被害が強いと、後に回避動機を強めないことが示された。また、回避動機の充足行動をとっているにもかかわらず相手からの暴力被害が強いと、後に接近動機を弱めることも示された。これらの結果は、回避動機の充足が資源負荷を要するものであるために、高負荷状態を避ける見通しが立たない場合、関係そのものに対する関与を低める可能性を示している。つまり、社会的回避動機の充足具合が、

関係そのものへの関与目標に影響することを示唆する。

以上の結果をまとめると、社会的文脈における回避動機の充足には、自己制御資源の多寡が関与しており、それによって充足の達成が左右される可能性が示された。一方、接近動機の充足については、自己制御資源による調整や仲介はみられにくいことも同時に示された。これら一連の結果は、社会的動機の充足における接近動機と回避動機の非対称性を示すものである。

親しい相手との関わりや職場での関係を継続する中で、快への接近を志向することもあれば、不快からの回避を志向することもあるだろう。本研究の結果は、快への接近は比較的容易に達成されやすいのに対して、不快からの回避の達成には自己制御のための資源が必要となりうることを示している。具体的な結果に即し例示すれば、ポジティブな感情をもつことや、(個人単位に対して) チーム単位での報酬体制にあることによって、利用可能な資源が確保される場合、結果的に回避動機の充足は達成されやすくなる。一方、そのような利用可能な資源に欠く場合、回避動機の充足は困難になりやすい。そして、回避動機の充足が困難である状態が続くことは、そもそもの動機対象からの回避を導く、例えば回避動機の充足されない対人関係への関与を低めるといえる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　5　件）

(1) 西本晴美・相馬敏彦 2017 組織的公正が自己制御に与える影響は，雇用形態の違いや正規雇用指向によって異なるか？非正規従業員に生じるプロセスに着目して．産業カウンセリング研究　査読有 第19巻1号 1-15
https://ci.nii.ac.jp/naid/40021367276
(2) 相馬敏彦・西村太志・高垣小夏 2017 攻撃的な人が不味い飲み物を与えるとき；挑発的行為と制御資源による影響．パーソナリティ研究　査読有 第26巻1号　23-37頁
https://doi.org/10.2132/personality.26.1.3
(3) 相馬敏彦・礒部智加衣 2017 社会的動機は個人を超えて影響をもつか？ダイアド関係における社会的接近動機の収束プロセス．実験社会心理学研究 査読有 第56巻2号　165-174頁
https://doi.org/10.2130/jjesp.si3-5
(4) 大上麻海・相馬敏彦 2016 回避志向性が従業員の革新的行動に及ぼす影響：チーム単位評価による調整効果の検討　産業・組織心理学研究 査読有　第29巻2号 129-138頁
http://www.jaiop.jp/journal/917.html
(5) 相馬敏彦・清水裕士 2016 ワンランク上のブランド・コミットメントはどう形成されるのか？；顧客の潜在ランクへの分類と拡張版投資モデルのブランドへの適用　マーケティングジャーナル 査読有　第35巻第3号(通巻第139号) 75-94頁
https://www.j-mac.or.jp/mj/download.php?file_id=435

〔学会発表〕（計　12　件）

(1) Soma Toshihiko & Ito Gen 2017 Does ″believing in fate″ overlook the dangerous behavior of a lover? The 12th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology(Auckland, New Zealand)
(2) Soma Toshihiko 2017 When does intimate partner violence increase social avoidance in relationships? The 18th Annual Society for Personality and Social Psychology Meeting (San Antonio, Texas, USA)
(3) 相馬敏彦　2017 若者を対象とするDV一次予防プログラムのもつ可能性 日本心理学会第 81 回大会（久留米シティプラザ）「DV をどう防ぐことができるか-リスク因子の解明と変容に向けて」公募シンポの企画、話題提供
(4) Soma Toshihiko 2016 How are social approach and avoidance motivation influenced by personal networks? The 31th International Congress of Psychology(Yokohama, Kanagawa, Japan)
(5) 相馬敏彦 2016 “No”というコミュニケーションが防ぐのは暴力の生起か反復か？-非協調的志向性による暴力抑制効果がみられるタイミング- 日本社会心理学会第57回大会（関西学院大学）
(6) SOMA Toshihiko 2015 Effects of doctors’ emotional support and favoritism on patients’ intentions toward follow-up care. The 11th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology(Cebu, Philippines)
(7) SOMA Toshihiko & YAMASHITA Tomomi 2015 Does the fulfillment of social approach and avoidance motivation enhance received social support? The 16th Annual Society for Personality and Social Psychology Meeting(USA)
(8) 相馬敏彦・西村太志・高垣小夏 2015 攻撃的な人を攻撃に駆り立てる条件 第62

回日本グループ・ダイナミックス学会大会 （奈良大学）
他 4 件

〔図書〕（計　1　件）
(1) 谷口淳一・相馬敏彦・金政祐司・西村太志（編著） 2017 エピソードでわかる社会心理学 恋愛関係・友人関係から学ぶ 北大路書房　190

〔その他〕
研究成果を含めた情報を公開する相馬敏彦のウェブサイト
http://home.hiroshima-u.ac.jp/souman/

６．研究組織
(1)研究代表者
相馬　敏彦（Souma, Toshihiko）
広島大学・大学院社会科学研究科・准教授
研究者番号：60412467

(2)研究分担者
前田　和寛（Maeda, Kazuhiro）
比治山大学短期大学部・総合生活デザイン学科・講師
研究者番号：30462055